

さじを投げる

清心女子高等学校二年 秋山慧

さみしくなった夜

わたしは手始めに

持っていたスプーンを窓から捨てた

次に本を

次に机を

次にベッドを

捨てた分だけ心が軽くなったような気がして

心だけはどこへでも行けるんじゃないか

テレビの中の知らない土地にも

海の底にも

宇宙の向こう側にも

だけれども体だけは鉛のように重くて

窓から自分を放り投げることもできない

時々自分を

どうしようもなくスポイルしたくなるけれど

どうしたらダメになれるのか

どのくらいダメになれるのか

わたしには分からない

だってまだ わたし 十七歳

じゆうななさい

人生はままならない

だからわたしは

泣きながら

窓から捨てたものたちを

また拾い集めるのだ

屈辱に耐えながら

他にどうしようもないから

もう一度だけがんぼろうと思うのだ

さみしさはにくしみを伴って

とっぜん

冷たい針が

ストンと落ちてくるようにやってくる

足の裏の

地面にくっついているところから

体が冷えていって

そのうち脳天まで侵される

そうしたらわたしはまた

窓からスプーンを投げ捨てる

叩きつけるように叫びながら

一番捨てたいものは重すぎて

捨てられないままに